

令和 6 年 6 月 9 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00615

研究課題名（和文）「移民二世代の若者」による母語を活用した教科学習支援に関する研究

研究課題名（英文）Research on Subject Learning Support Through the Utilization of Native Language by "Second-Generation Immigrant Youths"

研究代表者

清田 淳子 (Kiyota, Junko)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：30401582

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では言語少数派の子どもに対する国語の教科学習支援に、移民二世代の若者が支援者として参画することの可能性を、かれらの教授行動に注目して検討した。分析の結果、二世代の若者が主体的に進める「母語による学習」では、授業展開の各過程で自立的な教授行動が確認された。沈黙や誤答に対しては手がかりや身近な具体例を示すことで生徒が自力で正答にたどり着けるよう導き、正答の場合でも日本の中学校で学校生活を送った経験や共通の母文化・母国での学習経験をもつ強みを活かして理解の徹底を図った。一方、日本語支援者が進める「日本語による学習」場面でも、生徒の反応や状況を見ながら自らの判断で支援に関与した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

まず、移民二世代の若者の「学習支援の担い手」としての可能性を明らかにすることは、地域の人材の活用と母語支援者の確保につながり、母語を活用した学習支援が地域や学校で安定的に継続する道を拓く。次に、二世代の若者が母語母文化を同じくする子どもたちの教科学習に参画することは、二世代の若者自身の自己肯定感の向上とともに、参加生徒の学習意欲を高め、進路選択の拡がりにつながる。そして、教科学習支援を担う二世代の若者の存在は、言語少数派の子どもは「複数の言語資本をもつ子ども」であるという肯定的な認識を学校教員に広める意義をもつ。

研究成果の概要（英文）：This study examines the potential for second-generation immigrant youths to participate as supporters in language arts subject learning support for language-minority students, focusing on their teaching behaviors. The analysis results revealed that in "learning in the native language" actively led by second-generation immigrant youths taking the initiative, independent teaching behaviors were observed throughout the class. When faced with silence or incorrect responses, they guided students to reach the correct answers on their own by providing clues and concrete examples. Even in cases of correct responses, they sought to deepen understanding by utilizing their experiences of school life in Japan and their shared cultural and educational experiences from their home country. On the other hand, in scenes of "learning in Japanese" led by Japanese language supporters, they engaged in support based on their own judgment while observing students' reactions and situations.

研究分野：年少者日本語教育

キーワード：移民二世代の若者 教科学習支援 言語少数派の子ども 母語の活用

1. 研究開始当初の背景

日本における「言語少数派の子ども」(外国から来て日本で暮らす、日本語を母語としない子ども)に対する教科学習支援の方法に、子どもの母語を活用する取り組みがある。「教科・母語・日本語相互育成学習モデル(以下、相互育成学習モデル)」(岡崎 1997)もその一つで、このモデルに基づく学習支援では母語支援者が主導権をもって授業を進める「母語による学習」の場が設定されており、子どもは自由に操れる母語を用いて自分の思考を言語化し、支援者と内容の交渉を行いながら教科理解を深めている(朱 2007)。母語の活用は第二言語の習得や認知面の発達、アイデンティティの形成に重要な役割を果たすが(Cummins & Swain 1986)、支援の実施に際しては母語支援者の確保に課題を抱える。「相互育成学習モデル」では母語支援者の役割を留学生が担うことが多かったが、就職や帰国によって長期的な支援が難しい。課題解決に向けて、子どもの親や地域に定住し子どもと母語を同じくする人々を母語支援者として養成する取り組みが行われてきた(清田 2024、滑川 2015)。また、学生時代に母語支援者としての経験をもつ人材が学業を終えた後も継続的に学習支援に携わる方法として、時間や場所にとらわれない遠隔型支援の実践も行われている(清田 2019)。

このような中、本研究では自身が中学時代に母語を活用した学習支援を受けた経験をもつ移民二世世代¹の若者(以下、二世世代の若者)に注目する。そして、学習支援におけるかれらの教授行動を明らかにすることで、支援の担い手としての可能性と課題を検討する。

二世世代の若者による活動として、大学に進学した二世世代の若者が小中高時代の学校生活や進学に際しての経験を語る事例の増加や(拝野 2017)、二世世代の若者のアイデンティティ認識を母語(継承語)の流暢さや接触度からとらえた研究が行われている(Serrano・Shibuya 2019)、また、二世世代の若者が地域の教室で日本語を教えるケースも報告されているが(野山・桶谷 2016)、日本語をどのように教えたかについての検討はなされていない。そして、二世世代の若者が母語や母文化を同じくする言語少数派の子どもに対し、「相互育成学習モデル」に基づく支援で教科学習を教える取り組みは管見の限り見られず、本研究がその端緒となる。

2. 研究の目的

- (1) 母語を活用した学習支援を移民二世世代の若者が行う場合、かれらはどのような教授行動をとっているのか、その特徴を明らかにする。
- (2) 移民二世世代の若者は、母語支援者として学習支援を行うことについてどのような意識をもっているか、支援への参加動機や継続理由を探る。

3. 研究の方法

- (1) 学習支援の実施及びデータ収集については、神奈川県のある公立中学校の協力を得、教室談話データを録音して収集し、分析を行う。
- (2) 二世世代の若者による学習支援は日本語支援者と協働して、週1回90分、中学校の国際教室で放課後に行う。対象教科は国語である。
- (3) 母語支援者として参加する二世世代の若者は、同中学校の卒業生である(4名、いずれも中国出身)。支援開始時点で、1名は大学1年、1名は高校3年、2名は高校1年である。
- (4) 学習支援を担当した二世世代の若者を対象に、各年度途中と年度末に半構造化インタビューを行う。

4. 研究成果

- (1) 「母語による学習」の場面における二世世代の若者の教授行動

二世世代の若者が主体的に進める「母語による学習」では、音読、内容理解、ワークシート記入の各過程で自立的な教授行動が確認された。このうち内容理解の場面では、問いを提示するとき、単に課題を読み上げるのではなく、[問いに含まれる難語句の意味を確認する][問いをわかりやすく言い換える][質問の型を変える][問いを分割して提示する]ことを行っていた。また、問いを投げかけた後、生徒が沈黙したり答えが誤っていたりする場合、二世世代の若者はすぐに正答を示して説明するのではなく、[質問を繰り返す][手がかりを示す][具体例を挙げる][異なる視点から説明する]など生徒が自力で正答にたどり着けるよう導いていた。そして正答を得た後も[説明するだけでなく実際にやってみせる][教材文にはない新たな視点から説明する][母国で学んだことと関連づける]ことを行っていた。

このように二世世代の若者は、参加生徒と同じ中学校で学校生活を送った経験や共通の文化や母国での学習経験を有している強みを活かしながら生徒の内容理解を促し、理解の徹底を図っていた。また、インタビューからは、二世世代の若者による「母語による学習」は単に生徒と母語を同じくするからできたわけではなく、成人支援者同様、事前の準備段階で「こんなふう

¹「移民二世世代」の定義は研究者によって異なるが、本研究では樋口・稲葉(2017)らに倣って「外国で生まれ、小学校高学年から中学校の時期に来日し、日本の小学校あるいは中学校教育を受けている」者を「移民二世世代」と呼ぶ。

支援を進めてみよう」という授業展開のイメージが形成されていたことがわかった。

ワークシート記入の場面では記入を指示するだけではなく、[記述のポイントを示す] [自身の経験を示す] など手だてを講じて生徒の記入を支え、記入後にはその内容と表現の双方を吟味した上でアドバイスや評価を伝えていた。

この他、「母語による学習」全般にわたって観察された行動として、学習ストラテジーや学習経験を伝える、生徒の態度や意欲に働きかける、が確認された。では第二世代の若者自身が中学生や高校受験のとき、あるいは現在も活用している学び方や問題の解き方のコツを伝え、では[ほめる] [励ます] など肯定的な声かけに加え、生徒たちに対して「考えてみよう」と誘い、考えを言語化することを促し続けた。また、年齢の近い生徒に対しても「教える側」としての立場をふまえた姿勢が一貫して認められた。

(2) 「日本語による学習」の場面における第二世代の若者の教授行動

日本語支援者が進行役を務める「日本語による学習」においても第二世代の若者は受け身の姿勢で待機するのではなく、[日本語支援者の質問を中国語で伝える] [質問に関連して具体例を挙げる] [新たな視点から質問する] [具体例を挙げる] [本文上の手がかりを示す] など生徒の反応や状況を見ながら自らの判断で主体的に学習支援に関与していた。そして、日本語支援者もこのような卒業生支援者の自発的な行動を肯定的に受け入れていた。

一方、日本語支援者の明示的な求めに応じ、[質問に関連して具体例を挙げる] [図表の見方を説明する] [新たな視点から質問する] ことや、生徒の沈黙や誤答に対して、勉強や部活、アルバイト先のできごとなど、支援者自身が経験したリアルな例を内容理解の手がかりとして提供していた。生徒が正しく答えた後も[説明するだけでなく実際にやってみせる] ことを行っていた。すなわち第二世代の若者は< 支援活動を行う >だけでなく< 学習活動に参加する >という二種類の行動をしていることがわかった。

「日本語による学習」全般にわたって観察された行動としては、[励ます] や [ほめる] [同意や共感を示す] ことを自ら行う一方、日本語支援者の求めに応じて[学習ストラテジーや学習経験を伝える] [二言語を持つことの意義や楽しさを語る] 行動が確認された。

以上のような第二世代の若者の行動からは、大きく四つの特徴を見いだすことができる。第1は参加生徒と共通する経験の活用である。「共通する経験」には母国での学習経験（後述）も含まれるが、同じ中学校で学び、同じ地域で暮らしていることがもたらす共通の経験や、同年代の若者が持つ興味や関心事は、第二世代の若者が提供する具体例や言い換えに端的に反映され、参加生徒を惹きつけながら内容理解を促していた。

第2は「生徒に考えさせる」姿勢である。生徒に考えさせて発話を引き出すために質問を提示する段階から工夫をこらし、生徒の反応が薄いと見るや手がかりや具体例を示した。発言に対しては、励まし、褒め、同意や共感を明示的に伝えた。「生徒に考えさせる」姿勢の根底には、支援者自身が家庭や学校で「考える」ことを実践し、その中で自分で考えることの大切さへの気づきがあることがインタビューからも示唆された。

第3は母語や母国での学習経験の活用である。言語少数派の子どもたちが母国で学んだ知識や技能を活かし、強い方の言語で安心して学べるという、いわば日本語支援者だけでは創り出せない学びの環境に、「複数の言語資本を持つ」第二世代の若者は寄与することができる。

そして第4の特徴は、成人の支援者とは異なり、「日本語による学習」の場では第二世代の若者は「支援する側」と「学習活動に参加する側」の立場を自由に行き来できる点である。

第二世代の若者Aは支援活動を続けた理由として、「先生たちが私にくれたいろいろな助けに対して感謝したいから」と自分を支えてくれた人への感謝と、「私からも次の子たちに伝える」「そして次の子たちが成長して、今度私のかわりになって、その次の子たちに伝える」と、まさに支援の担い手が循環する可能性について言及している。言語少数派の子どもたちの急増が問題化した1990年代当初の状況とは異なり、高校や大学に進学して学び続ける子どもが珍しくない現在では、日本語を母語としない子どもの教育は、先の語りを借りれば「私から次の子へ、そしてその次の子たちへ」という支援の循環を意図的に組み込みながら展開していくことが可能な時期に入っているといえよう。

今後の課題としては、まず、第二世代の若者が安心して学習支援に取り組むためのサポート体制作りや学校の受け入れ体制作りがある。次に、日本語支援者との協働のあり方についてである。日本語支援者だけでは為しえない授業展開を可能にしてくれる貴重なリソースをどう活用するのか、そのアイデアや実践の蓄積も重要な課題である。

引用文献

- 岡崎敏雄 (1997) 「教科・日本語・母語相互育成学習のねらい」『平成8年度外国人児童生徒指導資料 母国語による学習のための教材』茨城県教育庁指導課、pp.1-8
- 拝野寿美子 (2017) 「『日本に住む移民の子ども』研究の課題と展望」『神奈川大学心理 / 教育研究論叢』42号、pp.121-131
- 清田淳子 (2019) 「言語少数派の子どもに対する母語を活用した遠隔型教科学習支援の試み スカイプを利用して」『日本語教育』174号、pp.31-44

- 清田淳子 (2024) 「「地域の母語支援者」による母語を活用した教科学習支援の特徴 「地域の母語支援者」が行う読みの活動や発問に注目して」『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究』特別号、pp.31-55
- 朱桂栄 (2007) 『新しい日本語教育の視点 子どもの母語を考える』鳳書房
- 滑川恵理子 (2015) 「言語少数派の子どもの生活体験に裏打ちされた概念学習 身近な大人との母語と日本語のやり取りから」『日本語教育』160号、pp.49-63
- 野山広・桶谷仁美 (2016) 「CLD 児 / 生徒の言語環境の整備と日本型多文化共生社会-社会参加という観点から」『異文化間教育』44号、pp.18-32
- 樋口尚人、稲葉菜々子 (2017) 「間隙を縫う ニューカマー二世世代の大学進学」『社会学評論』68(4)、pp.567-583
- Cummins, J., & Swain, M. (1986) *Bilingualism in education*. Longman.
- SERRANO, D., & Shibuya, M. (2019) “The Identity Perception among Young Japanese Brazilians Living in Japan: A Case Study about Learners of Portuguese as Heritage Language”, in *Bulletin of Nara University of Education, Cultural and Social Science*, 68(1), pp.33-50.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 清田淳子	4. 巻
2. 論文標題 「移民第二世代の若者が行う母語を活用した学習支援の分析 支援者の教授行動の特徴」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 「令和3年度 令和5年度科学研究費補助金研究成果報告書『移民第二世代の若者』による母語を活用した教科学習支援に関する研究」	6. 最初と最後の頁 29-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清田淳子	4. 巻 特別号
2. 論文標題 「「地域の母語支援者」による母語を活用した教科学習支援の特徴 「地域の母語支援者」が行う読みの活動や発問に注目して」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究』	6. 最初と最後の頁 31-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

清田淳子（2024）【文献・図書紹介】「多言語化する学校と福宇言語教育－移民の子どものための教育支援を考える－」『異文化間教育』59号、p167

6. 研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	王 植 (Wang Zhi)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	熱海 まき子 (Atsumi Makiko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関